

 労協連だより

古村 伸宏

2011年の年明け。卯年は跳躍の年というが、どこに向かって何が跳躍するのか。気がつけば、21世紀の最初の10年が終わりを告げた。かつて21世紀は「希望の未来」だった気がするが、今のところ「絶望の現実」に覆われる日々だ。この暗黒と狂気の中で、「協同労働」の必要性和、その協同組合の法制化の重要性は増している。

年末から年始にかけ、新たな事業の広がりや押し寄せてくる機運が高まっている。埼玉県で始まった生保受給者の自立支援・就労支援が、全国的に次年度の最大の取組みになる勢いだ。また、政府が第2のセーフティーネットとして力を入れる「パーソナル・サポート・サービス」も、全国7カ所前後で関わりを持つことになりそうだ。こうした課題に、協同労働という考え方がコミットするのはなぜか。働き方や雇用労働の閉塞感や限界を感じつつも、根本的な期待は「当事者主体」であり、困難にある人々自身の力を高め発揮するエンパワーメントこそが、協同労働に寄せられている期待ではないだろうか。それを可能にする「関係の創造」が協同労働の核心である。この期待に応えるのは容易ではないが、相当の時間と覚悟を費やし、最も社会の根幹で苦しむ人々、根本で起こっている問題にこそ、火中の栗を拾う覚悟で運動をつくる必要性

を感じる。それは、「自分のこと」一色に染まりつつある社会を、もう一度「誰かのため」に熱くなり、強くなる連帯感あふれるものへと染め直していくことだ。

協同労働運動は、「無縁」と「狂気」の社会にあって、壮大な「縁結び」の役割を負い、地域の中で「正気」のネットワークを紡いでいく存在となり得るか。2012年の国際協同組合年に向けた、我々の最大のテーマである。先の見えない政治状況や、混沌とする世界情勢の中で、もう一度「日本」という国のアイデンティティの構築が求められている。世界の中でも、「協同労働」という働き方と、「協同労働の協同組合」という組織論は、日本が誇りうる象徴的なアイデンティティとなり得るのか。そのためには、この運動に携わる我々自身の中にある、「文化」の成熟が不可欠となるだろう。

この正月に、わが心に響き渡ったナンバーは、懐かしの「情熱の薔薇」(THE BLUE HEARTS)。車の中で繰り返し聞き入った。♪心のずっと奥の方♪に潜んだ、人間が最も大切にすることを、表現し、感じ取る1年にしたい。このことが、協同労働の事業と運動に最も求められていることだと信じて。組合員・市民の心のずっと奥から、いろいろな叫びが登場し始めている。